

古代中国にUFOは飛来していたか？（其一）

——古典文献の基本的な使い方からの考察——

明木茂夫

（目次）

はじめに

一、諸葛孔明の死に際して現れたUFO？——『晋陽秋』と『三国志』『晋書』『宋書』

二、南京で目撃されたUFOの図？『吳友如画宝』「赤燄騰空」

はじめに

決してふざけているわけではない。本人は大真面目である。小論は中国古典の中の空飛ぶ物体に関する記述を以て

古代中国にUFOが飛来していた証拠だとする主張に対し、これを原典に当たりつつ検証しようとするものである。予めお断りしておくが、私は特にUFOビリーバーではない。但し頭から否定してかかるのも科学的な態度ではない、とは思っている。十分な証拠を以て正しい論証で納得させてくれるなら、それを信じるにやぶさかではない。しかし論証に不備があつたり、立論にごまかしや不当な誘導があつたりすれば、その論は自らの信頼性を失うであろう。

UFOの存在の真偽はなにも天文学や科学技術からのみ論じられるものではない。都市伝説としてのUFO説話がどのように成立し流布してきたかは社会学や歴史学の手法で研究する価値があるし、UFOに遭遇したという人の体験を分析するには心理学や精神分析学も必要であろう。ここで問題にするのは中国古典の記述であるから、これを客観的に分析するには人文学たる中国学の出番である。

小論は私が平成十三年度に本学で行つた国際文化論IVの講義録を発展させたものである。この講義はUFOの証拠だとされる文献を取り上げ、これを実際に詳しく読むことで学生を漢文に親しませ、そこから客観的で科学的なものの考え方とは何かに考えを至らせようとするものであった。そこで小論は学生・院生諸君が読んでくれることを期待して、中国文学の基本的な知識ができるだけ解説するよう努めた。中国学を専門とされる読者に対しては言わずもがなの部分も多いだろうが、お許しいただきたい。

UFOという言葉は「Unidentified Flying Object」の略である以上、あくまで国籍不明の航空機を含む未確認の飛行物体のことと、本来空飛ぶ円盤（フライングソーサー）や宇宙人の乗り物（エイリアンクラフト）を指すわけではない。しかし小論で取り上げる書籍やウェブページではおしなべてエイリアンクラフトを指してUFOと言つておられるようなので、小論でも以下ほどこの意味で用いている旨予めお断りしておく。

では早速諸葛孔明の死に際して現れた不思議な光の話から俎に載せてみよう。

一、諸葛孔明の死に際して現れたUFO? ——『晋陽秋』と『三国志』『晋書』『宋書』

王矛・王敏共著『中国文化故事物語』⁽²⁾という本がある（以下『文化故事』と言う）。まことに夢のある楽しい本で、中国の風俗や歴史に関する興味深いエピソードが沢山収められている。その14「古代中国にUFO」に

一九七九年九月、中国に「UFO愛好者連絡所」が作られ、翌年「中国UFO研究会」と改称して系統的かつ組織的な研究が正式に始まった。

その結果驚くべき事が発見されたのである。すでに千年も前から空飛ぶ円盤は中国にやってきていたのである。しかも、その数は少なくない。中国の古代の文献には、多くの不明飛行物体についての記載があって、その描写の正確さ形状表現の細かさによると、現在のいわゆる空飛ぶ円盤とほぼ同一の物と判断出来るようである。（傍点明木）

とある。傍点部からも分かるように、この『文化故事』は現在流布しているUFO説話を基本的にそのまま下敷きにしておられるようである。続く部分では次のように述べておられる

これまでの調査では「晋陽秋」が空飛ぶ円盤について記録した最初の古典作品で、紀元二百三十四年の秋に起こった事件について述べている。「光線を発する赤い星が、四方八方に、東北から西南へと光り、亮當（諸葛孔明の駐在地）に落ちた。星は三回も往復した。時に大きく、時に小さく輝いた後、光りが消えるのと同時に亮（諸葛亮）が死んだ。」とある。輝いたものが星ならば、三回も往復できるはずがないし、大きくなったり、小さくなったりするわけもない。このほかに「三国志」、「通志略」、「文献通考」等の古書の中にも同じ記録がある。しかし、

この記録は古代の占星術にすぎないと、これまで考えられていたので、ほとんど注目されていなかつたのである。ところが、もし、他の星にも生命が存在している可能性があるとしたら、これらの記録も、もう一度見直さなければならない。

なるほど大変興味深い内容ではある。しかしこの原典を確かめようとするとたちまちいくつもの疑問が湧く。まず『晋陽秋』という本は佚書だということである。ではなぜ失われて今日に伝わらない本の内容が分かるのか？ それは別の本に引用されているからである。『三国志・蜀書』卷五「諸葛亮伝」に

其年：（中略）：八月、亮疾病、卒于軍。時年五十四。

—— その年（建興十二年 二三四年）、：八月、亮疾病し、
軍に卒す。時に年五十四。

とあり、この部分の裴松之の注に

晋陽秋曰、有星赤而芒角、自東北西南流、投于亮營。
三投再還、往大還小、俄而亮卒。

—— 晋陽秋に曰く、星の赤くして芒角たる有り、東北より西南に流れ、亮の營に投す。三投して再び還り、往くは大にして還るは小、俄にして亮卒す。

と引用されているのである。よってここで問題となっている文章は、あくまで『三国志』の「裴注」に引くところの『晋陽秋』に曰く、としなければならない。そうするとその後の

このほかに「三国志」、「通志略」、「文献通考」等の古書の中にも同じ記録がある。（傍点明木）

というのも大変問題のある表現であろう。今述べたようにこの『晋陽秋』は『三国志』の注に引かれている。ならば「同じ記録」が『三国志』にあるのは当たり前のである（お断りしておくが、『三国志』ではなくあくまで『三国志』の注に、である）。続く『通志略』と『文献通考』も、著者自身が注釈しておられるように、宋代以降の書物である。

何百年も後の書物がこの記述を引用しているのを指して「同じ記録」がある、と言われても困るのである。

ついでに重箱の隅をつつかせていただくと、『通志略』を引いたならなぜ『通志』を引かないのか。『通志略』は同じ著者による『通志』の言わばダイジエスト版、正確に言うと南宋の鄭樵の『通志』の内の卷「十五「氏族略」から卷七十六「昆虫草木略」までを抜き出してまとめたものが『通志略』である。⁽³⁾ 「同じ記録」は当然『通志』にある。そして、その双方を確かめたならば『通志略』より『通志』を引くべきだと分かったはずなのである。整理してご説明しよう。実は『通志』にはこの星のエピソードが二箇所に記載されているのだ。

○『通志』卷七十四・災祥略第一「星」

蜀後主建興十三年、諸葛亮屯渭南、有星流、投亮營、三投再還。

○『通志』卷一百十八上・列伝第三十一上「蜀・諸葛亮」

有星赤而芒角、自東北西南流、投於亮營。三投再還、往大還小。八月、亮疾病、卒於軍。時年五十四。

ご覧のとおり、「災祥」の卷では簡単な星の記述のみ、諸葛亮の伝では『三国志』の本文と裴注を合体させた記述となっている。そして、『通志略』には前者のみ収録されていて、後者は収録されていない（『通志略』は『通志』の卷二十五から卷七十六までの抜き書きなのだから、卷一百十八が入っていないのは当然だ）。ということは要するに、作者の言う「同じ記録」は厳密には『通志』にしか収録されていないということなのである。

そんな細かいことはどうでもいいとお叱りを受けそうだが、ある主張を読者に納得させようとすれば、文献の引用や校勘はなるだけ正確に、というのが小論の主旨なのでお許しいただきたい。UFOのことを読みたくて本書を手にとった一般の読者には『通志』でも『通志略』でも関係ない？はたしてそうだろうか？文献の扱い方が適切でなければ、その主張の信頼性にも疑問が生じはしないだろうか？それにどちらでもよいのなら『通志』の方を挙げてお

けばよい。そもそも文献の引用に際しては、その記述を読者が自分でも見付けられる程度の典拠のデータを示すのが原則だ。このままでは『通志略』に「同じ記録」を見付けられない可能性もある。⁽⁴⁾

確かに一つの記述のみに頼るのは十分ではなく、複数の証拠でこれを補強する態度は学術的である。しかし右で見たようにこの場合は違う。結局「同じ記録」がこんなにある、と並べた書物は元は『晋陽秋』に、正確には『三国志』の「裴注」に引く『晋陽秋』に行き着くわけで、残念ながら論の補強にはならない。そればかりかいかも証拠が複数あるかの如く読者に思わせようという意図さえ感じられる。

「しかし沢山の本に引用されているのはそれだけ有名なエピソードだからだろう」と言われば確かにそうだ。沢山並べさえすればよいのなら、『文化故事』の挙げるもの以外にもこの「同じ記録」はいろいろ残されている。ちなみに私の杜撰な調査によつてさえ、『四庫全書』著録のものに限つても以下の書物に見出すことができる。

○史部・正史類

『晋書』卷十三・天文志下「流星隕」★

『宋書』卷二十三・天文志一★

○史部・別史類

（南宋）鄭樵撰『通志』卷一百十八上・列伝第三十一上「蜀・諸葛亮」★

（元）郝經撰『郝氏續後漢書』卷十五・列伝第十二「漢臣・諸葛亮」★

○史部・伝記類

（明）楊時偉編『諸葛忠武書』卷二★

(清) 朱軾撰『史伝三編』卷十七「名臣伝・漢・諸葛亮」☆
 ○史部・地理類

『陝西通志』卷七十七・紀事第二「蜀漢」☆

『陝西通志』卷四十六・「祥異」★

(元) 馬瑞臨撰『文献通考』卷二百九十一・象緯考十四「流星星隕」★

○子部・術數類

(唐) 瞿曇悉達撰『唐開元占經』卷七十一・流星占一・流星名狀一★

○子部・雜家類

(元) 陶宗義『說郛』卷五十九下★

(明) 徐応秋撰『王芝堂談薈』卷二十・流星名狀★

○子部・類書類

(唐) 虞世南撰『北堂書鈔』卷一百五十「天部二・星五」☆

(北宋) 李昉等撰『太平御覽』卷七「星下・妖星」☆

(南宋) 潘自牧『記纂淵海』卷六十六「物理部・朕兆」☆

(南宋) 謝維新撰『古今合璧事類備要』前集卷一「天文門・星」☆

(南宋) 謝維新撰『古今合璧事類備要』前集卷六十三「喪紀門・死喪」★

(明) 陳耀文撰『天中記』卷二「星」☆

(明) 陳禹謨撰『駢志』卷十三「庚部上」☆

(明) 彭大翼撰『山堂肆考』卷二「天文・星」☆

(清) 『御定淵鑑類函』卷四「天部四・星」二☆

(清) 『御定淵鑑類函』卷一百七十八「儀礼部二十五・死喪三」☆

(清) 『御定佩文韻府』卷九十二之一☆

(清) 『御定駢字類編』卷一百三十六・采色門三・「赤」★

もちろん「他にもこんなに同じ記録があると」言つても意味はないことはお分かりだろう。後の時代のものはみな「引用」である。だが問題はその引用のされ方なのである。

実は書物の成立時期や性質を考慮せずに四部分類で並べただけのこの一覧からでさえも、重要な情報を読み取ることは可能である。それは、このエピソードの記述に一系統あることである。右の一覧で☆と★をつけて区別しておいたのがそれだ。☆は「有星」で始まる『三国志』「裴注」系統のテキストで、概ね

晋陽秋曰、有星赤而芒角、自東北西南流、投于亮營。—— 晋陽秋に曰く、星の赤くして芒角たる有り、東北よ

三投再還、往大還小、俄而亮卒。(『三国志・蜀書』)

—— 往くは大にして還るは小、俄にして亮卒す。

となっている。★は「有長星」で始まる『晋書』『宋書』系統のテキストで、概ね

有長星赤而芒角、自東北西南流、投亮營。三投再還、—— 長星の赤くして芒角たる有り、東北より西南に流れ、往大還小。占曰、両軍相當有大流星來走軍上及墜軍中者、皆破敗之徵也。九月亮卒于軍、焚營而退、羣帥—— 亮の營に投ず。三投して再び還り、往くは大にして還るは小なり。占に曰く、両軍相當に大流星の來り

交怨、多相誅残。(『晋書』卷十三)

(『宋書』卷二十三は「焚營」以下を「當而退群

帥交惡多相誅殘」に作る。)

て軍上を走り及び軍中に墜つる有るべき者は、皆破敗の徵なり。九月亮軍に卒し、營を焚きて退き、羣

帥怨を交へ、多く相誅残す。

となつてゐる。いかがだらう。裴注では孔明は星の出現からほどなくして(俄にして)亡くなつてゐる。一方これを『晋書』『宋書』系統のテキストに見るとかなり話が変わつてゐる。諸葛孔明は月が替わつて九月になつて亡くなつたのであり、諸葛亮の陣營に落ちたという流れ星はあくまでそれを匂わせる「凶兆」として占われてゐる。もちろん月が替わつていても孔明の死が一箇月後であったとは限らないわけだが、裴注と『晋書』『宋書』では星の出現から孔明の死までの時間のニュアンスがかなり違う。また後者では占いのエピソードがより強調されてゐる。

だから早い話、『文化故事』は「このほかに『晋書』や『宋書』の中にも同じ記録がある」と書くべきだったのだ。こうしたエピソードを以てUFOの証拠だと立証するのなら、否、UFO以外の論証でも同じ事だが、やはり基本的なテキストの検証はきちんとしておくがよからう。とにかく光るもののが飛んでいる話を見付けて来ては全てUFOだと言つても、異文が存在するかもしれないるのである。

さて、右の一覧の内「子部・類書類」とある「類書」とは今日に言う百科事典であり、基本的に内容別分類である。分類の仕方は今日我々が考える分類とはずいぶん違うが^⑤、これは中国の古典的学問体系に都合よくできているのである。このエピソードはご覧のように古典的な類書の体例においては概ね「星」の項目にあり、凶兆として扱われている。少なくともこれを記録した古人はあくまで「不思議な星の話」として認識していたことがこのことからも分かる。

さらに次は直接の引用ではなく、詩歌の典故となつてゐる例である。上段に本文、下段に注釈を示している。

（北周）庾信「奉報寄洛州」

【本文】

星芒一丈燄

月暈七重輪

（北周）庾信「擬詠懷二十七首」其十一

【本文】

直虹朝映墨

長星夜落營

（唐）杜甫「故武衛將軍挽歌三首」其一

【本文】

嚴警當寒夜
前軍落大星

【注釈】

晋陽秋、有星赤而芒角：（裴注系テキスト 略）。

漢匈奴伝、高帝七年、月暈囲參畢七重、是歲冒頓囲高帝於白登七日、取閼氏之言乃開囲一角。

（清）吳兆宜『庾開府集箋註』卷四

【注釈】

天文志曰、虹頭尾至地、流血之象。

蜀後主建興十三年、諸葛亮帥大衆伐魏屯於渭南、有長星赤而芒角、：（晋書系テキスト 略）：多相誅殘。言梁元帝江陵敗亡之徵也。

（清）倪璠『庾子山集』卷三

【注釈】

晋陽秋曰、有星赤而芒角：（裴注系テキスト 略）：而亮薨。趙云、軍事以嚴終軍中、謂之嚴警。

（南宋）郭知達編『九家集注杜詩』卷十九

(唐) 杜甫「謁先主廟」

【本文】

霸氣西南歇

雄圖歷數屯

洙曰、晋陽秋曰、有星赤而芒角：(裴注系テキスト略)：俄而亮卒。譙周云、西南上有黃氣。趙曰、譙周等初勸進曰霸氣、願大王應天順民。今葛亮已死中原莫囬、則霸氣所以歇也。

【注釈】

(南宋) 黃希原本・黃鶴補注
『補注杜詩』卷三十一

(唐) 温庭筠「經五丈原」

【本文】

天清殺氣屯閨右
夜半妖星照渭濱

(唐) 胡曾「詠史詩」「五丈原」

【本文】

長星不為英雄住

半夜流光落九垓

【注釈】

晋陽秋曰、有星赤而芒角：(裴注系テキスト略)。

(明) 曾益『溫飛卿詩集箋註』卷四

(宋) 欠名注⁶『詠史詩』卷下

晉陽秋曰、有星赤而芒角、自東北西南流亮營中、俄而亮卒。

(北宋) 蘇軾「是日至下馬磧、憇於北山僧、舍有閣曰懷賢、南直斜谷、西臨五丈原、諸葛孔明所從出師也」

【本文】

一朝長星墜
竟使蜀婦髽

【注釈】

續諸葛亮伝注載晋陽秋曰、有星赤而芒角……(裴注系
テキスト 略)。

(南宋) 王十朋『東坡詩集註』卷一

これから少なくとも言えるのは、諸葛亮の死に際して不思議な流れ星が現れたという話は昔の中国の文人にとって割にメジャーなエピソードだったということである。だからこのように詩歌の字句に典故として取り入れられているのだ。典故というのは基本的に、読み手がこれを見て「ああ、あの話だな」と分からなければ意味がないのである。

右の例の内、庾信の「擬詠懷」詩其十一を少し詳しく見てみよう。本文は

直虹朝映墨、長星夜落營 (直虹 朝 墨に映じ、長星 夜 執に落つ)

である。直訳すれば

まっすぐな虹が朝 防墨に映え、長く尾を引く星が夜 陣營に落ちる

である。しかしもちろん、この対句は実際に虹が架かり流れ星が流れた情景を詠んだものではない。古人がここから読み取るのは、虹や流れ星の美しさなどでは断じてない。典故が分からぬとこの内容は分からぬのである。そこで清の倪璠の注釈を見よう。

天文志曰、虹頭尾至地、流血之象。(天文志に曰く、虹の頭尾地に至るは、流血の象。)

蜀後主建興十三年、諸葛亮帥大衆伐魏屯於渭南、有長星赤而芒角：(晋書系テキスト 略)

言梁元帝江陵敗亡之徵也。(言ふこころは、梁の元帝江陵敗亡の徴なり。)

これによればここには

○両端が地面から地面まで延びている虹は流血の象しゆうである。(『晋書』卷十二・天文志中「雜氣」)
 ○諸葛亮が亡くなるときに、不思議な流れ星が陣營に落ちた。これは破敗の徵きせいである。(『晋書』卷十三・天文志
 下「流星隕」既出)

という二つの典故が踏まえられている。よってこの典故を知った上でこの詩句を読めば非常に不吉な表現であること
 は明らかだ。さらに注釈によれば、この詩句は具体的には梁の元帝の敗北の象のことを言っている。両端まで架かっ
 た見事な虹（ああ、美しい）、そして不思議な流れ星（戦に勝てるようにお祈りしよう）、などという現代人の連想を
 以てしては、この詩句を正しく解釈することなど絶対にできないのである。これが「典故を踏まえる」ということな
 のだ。

結局、このエピソードの原典を検証して言えることは、古人はあくまでこれを「不思議な流れ星」として記録し、
 また典故に用いていた、ということである。そして五丈原の近くにはこのエピソードにちなんだ「落星亭」「落星湾」
 「落星郷」「落星堡」「豁落城」という場所が実際にあるのだそう(7)で、さらにこの「落星亭」にはなんと、諸葛亮が亡
 くなったときに落ちたという隕石(8)、そのものが石碑にはめ込むように安置されているのである！まさかこれが本当に
 その時の隕石であったとはとても思えないが、このことから民間に於いても、このエピソードはあくまで星の話とし
 て伝えられていたということは言えるのではなかろうか。『文化故事』はこのように述べていた。

しかし、この記録は古代の占星術にすぎないと、これまで考えられていたので、ほとんど注目されていなかつた
 のである。

不思議な流れ星を「凶兆」と見るのを「占星術」と言えるかどうか私は浅学にして判断できないが、従来は少なくとも吉凶の「占い」の文脈で扱われているのは確かである。古人があくまで流れ星の話として伝えたものを敢えてUF

Oの話だと断ずるにはそれなりに強力な論拠が必要であろう。「当時はUFOという概念は存在しなかったので、古人はこれを流れ星だと考えたが、UFOに関する知識を持った現代人の目から見れば、確かにUFOだと解釈できる」と考えることは可能だ。しかし逆に「現代人は都市伝説としてのUFO説話を盲信しているので、古人の記した不思議な星の話がみんなUFOに見えてしまう」とも言えるわけで、この両者の論理的な「確からしさ」は変わらないのだ。それでは夢がない、ロマンがないというお叱りが聞こえそうだが、敢えて言う。小論は「夢」を論じてているのではない。「夢」がなければならないと最初から決まっているのなら、はなから議論にならない（私は密かにこれを「夢による言論統制」と呼んでいる）。それに古人の知識の方が常に勝っていると考えるのは、現代人の傲慢だ。ともかくこれだけは言える。このように古典文献を論拠としてあることを主張する場合は、必ずテキストの異文をチェックし、正確な現代語訳を心がけなければならない。

さてそこで、この部分の『文化故事』の記述をさらに細かく検討してみよう。まず『晋陽秋』の訳文である。

「光線を発する赤い星が、四方八方に、東北から西南へと光り、亮りょうえい營（諸葛孔明の駐在地）に落ちた。星は三回も往復した。時に大きく、時に小さく輝いた後、光りが消えるのと同時に亮（諸葛亮）が死んだ。」

となっている。「光線を発する赤い星が、四方八方に」の原文は「星の赤くして芒角たる有り」である。この芒角というものはここでは光芒、きらきらと輝く星の光の先端のことである。例えばアメリカや中国の国旗の星（Pentagram ☆）は五芒星、ダビデの星（Hexagram ☶）は六芒星だ。だとすると「光線を発する」というのは意訳が過ぎるのではないか。「芒角」を「四方八方に」と訳しているとしても、このままでは「赤い星」が「四方八方」に飛んだことになってしまいます。

「東北から西南へと光り」の原文は「東北より西南へ流れ」。「時に大きく、時に小さく輝いた後」の原文は「往く

は大にして還るは小かへ」だから、正確には「行くときは大きく、帰るときは小さくなつた」である。さらに「光りが消えるのと同時に」の原文は「俄して亮卒す」であるから、少々アレンジが過ぎるよう位に思う。ちなみに筑摩書房版『三国志』訳注(9)では

『晋陽秋』にいう。赤くとがつた星が東北より西南に流れ、諸葛亮の陣営に落ち、三たび落ちて二度は空に戻つた〔が、三度日は落ちたままだつた〕。落ちたときは大きく、戻るときは小さくなつていた。にわかに諸葛亮はなくなつた。

となつてゐる。

また『文化故事』の

輝いたものが星ならば、三回も往復できるはずがないし、大きくなつたり、小さくなつたりするわけもない。

というのもかなり強引な議論ではないだろうか？確かに大きくなつたり小さくなつたり、というのは普通の星ではなかろう。だからといって大きくなつたり小さくなつたりするのがUFOだろうか？『文化故事』の筆者は、ケネス・アーノルドが最初に目撃し、カーター元大統領が目撃し、ヒル夫妻が誘拐されて身体検査をされたというアメリカのUFO都市伝説（一六〇～一六三頁）と「ほぼ同一の物」（一五三頁）が中国にも飛来していたと考えておられる。ならば、宇宙人ばかりか生身の地球人であるヒル夫妻も搭乗できるUFOが「大きくなつたり、小さくなつたりする」というのは困るのである。さらに

もし、他の星にも生命が存在している可能性があるとしたら、これらの記録も、もう一度見直さなければならぬい。

というのもいかがなものか。「他の星に生命が存在している」ならば「これらの記録がUFO」だというのは少々論

理の飛躍があろう。意地悪を言えば、UFO＝エイリアンクラフト説はあまたあるUFO説話の一つであり、他にも旧ソ連の秘密兵器、旧ナチスの秘密兵器、地底人の乗り物、等いろいろな説があるらしい。そうするとこれは地底人が存在している可能性も考慮すべきではないだろうか？

どうも『文化故事』の訳も記述もこのエピソードを既存のUFOのイメージに誘導しようとする傾向があるようと思えてならない。しかしこれをUFOの証拠だと言えるなら、他の多くの流れ星の話もみんなUFOにしてしまえるのではないか。試しに右に挙げた一覧の類書をどれでも一つ紐解いてみていただきたい。既に述べたように類書というものは内容分類の百科事典である。このエピソードの前後にはそれこそ山のように不思議な話が集めてある。UFOに似た話の二つや三つ見つからない方がおかしい。事実中国のUFO研究家には類書をもとに次から次へとUFOの証拠を発見しておられる方があるのだが、これは小論（其三）で論ずる予定である。

考えるに、諸葛孔明の死に際して丁度UFOが現れたというのもどうも出来すぎた話だ。孔明が亡くなったのは当時、特に蜀にとつては一大事だったわけだが、宇宙人がそれを探知して飛来したのだとすれば、彼等の偵察能力は物凄いということになる。原典とその異文をきちんと確かめれば、たまたま目撃された不思議な流れ星の話を地上の人々が孔明の死と結びつけてその凶兆だと見なした、というのが現実に近いのではないだろうか。ただ『晋陽秋』（裴注）の説と『晋書』『宋書』の説では、星の出現と孔明の死のタイムラグが異なる、というだけのことなのである。

二、南京で目撃されたUFOの図？『呉友如画宝』「赤燄騰空」

次に取り上げるのは清の呉友如の「赤燄騰空」図である。これについては武田雅哉氏が好著『清末絵師呉友如の事件帖^{〔10〕}』（以下『呉友如の事件帖』と言う）及びそれに先立つ「中国飛翔計画図説^{〔8〕} 見上げてごらんUFOを」で実際に楽しく紹介しておられる。

清末になると、UFOは、絵にも描かれ、人びとの目を楽しませるようになる。ある秋の夜、南京の人びとは、南の方角に一個の火の玉を見た。おりしもこの時は北向きの風が吹いていたが、それに流されるようでもなく、物体は西から東へと、ゆっくりと移動し、まるで自由自在に動けるかのようであった。かすかな音をたてていたという証言もある。

この事件を報道した絵が残っている。絵師は呉友如。^{〔11〕}もちろんその場でスケッチしたものではないだろう。おもしろいのは、天の異常を見上げる人びとのほうである。中国人の「天の異常」や「飛翔」をめぐるおしゃべりが聞こえてきそうだ。右上にチヨンと描かれたUFOはさておき、絵師は、これを見上げ、その正体をめぐって議論を交わす南京の人びとを、朱雀橋の上下にびっしり描きこむことによって、時代の大きな変わりめに起きた小さな怪事件のムードを、みごとに伝えている。（「見上げてごらんUFOを」）

未確認飛行物体、UFOというやつでございましょうか。その目撃譚もまた、この国の膨大な資料庫には、あふれておりました。台湾では、三個の光る球体が出現したことがありまして、『点石斎画報』にも絵が載りまし

た。それらの報道内容にかぎっていえば、それに何ものかが乗っているというようなところまでは、想到してはおりませんが、中国の古代の物語には、別世界の人びとが、不思議な乗り物に乗って中国を来訪したとの事件は、いくつか報告されております。（『呉友如の事件帖』）

一方この同じ「赤燄騰空」図に対して『文化故事』はこれとはがらりと違った調子で次のように述べておられる。

清の時代の呉友如は、めずらしい作品を作っている。それは、南京市民が朱雀橋の一角に押し合って、空の片隅に光っている丸い円盤状のものを仰ぎ見ているものである。画伯は、その絵に解説をつけている。：（中略）：珍品とも言える絵に解説がついているので、なおのこと生き生きとした迫真力があって、信じないわけにはいかないだろう。

引用箇所のみの文脈からすればこの「信じないわけにはいかないだろう」というのは、この絵の内容つまり「南京で夕方の空に赤い光が目撃された」ことを信じないわけにいかないことになるのだが、全体をよく読むとそうではなく、「これがUFOである」ことを信じないわけにはいかないと言いたいらしい。しかしいかに絵が生き生きしていようと、UFOの実在の直接の証明にはならないだろう。丸山応挙の幽霊がいかに真に迫っていようと、その実在の証明にはなるまい。それはともかく武田氏と『文化故事』では同じ資料に対する基本的な立場が異なっている。

この絵に関しても意地悪な言い方をすれば、この事件は現代人が集団で宵の明星をUFOと見誤った事件によく似ている、と言うことも可能である。しかし「これは明らかにUFOだ」というのと「これは明らかに宵の明星を不思議な光と勘違いしたのだ」という二つの言い方は、この資料のみに依拠する限りどちらの「確からしさ」も変わらない。水掛け論になってしまふ。そこで、少し別の角度から考えてみよう。この資料の引用のされ方である。

この「赤燄騰空」図は中国でもしばしばUFO関連の雑誌やウェブページに取り上げられている。例えば、「飛碟⁽¹²⁾

在中国 (UFO in China)」というウェブページの「古代中国のUFO記録」(以下「中国のUFO」と言う)には「揚州明珠」⁽¹³⁾「宋代文人記述不明飛行物」「金陵赤焰騰空図」という三つのコンテンツがあり、そのうち「金陵赤焰騰空図」では次のように述べる。⁽¹⁴⁾

金陵赤焰騰空

清代画家吳有如晩年作品、有一『赤焰騰空』図、画面是南京朱雀橋上行人如雲、皆在仰目天空、爭相觀看一團團熠熠火焮。画家在画面上方題記寫到、

九月二十八日、晚間八点鍾時、金陵（今南京市）城南、偶忽見火球（即球）一團、自西向東、型

如巨卵、色紅而無光、飄蕩半空、其行甚緩。維時浮雲蔽空、天色昏暗。拳頭仰視、甚覺分明、

立朱雀橋上、翹首踮足者不下數百人、約一炊許

漸遠漸減。有謂流星過境者、然星之馳也、瞬息

即杳。此球自近而遠、自有而無、甚屬滯滯、則

非星馳可知。有謂兒童放天燈者、是夜風暴向北

吹、此球轉向東去、則非天燈又可知。衆口紛紛

窮於推測。有一叟云、是物初起時微覺有聲、非靜聽不聞也、系由南門外騰越而來者。嘻、異矣。

（以下引用文、略）

清代の画家吳有如（吳友如の誤り）の晩年の作品に「赤焰騰空」がある。画面では南京の朱雀橋に通行人が雲のように集まって、空を仰ぎ見ながらわれ先にとまん丸で明るく輝く火炎を見つめている。画家は画面の上方に題記を記している。

清人吳有如の題記は、詳細で生き生きした目撃報告だと言える。火の玉が南京を通過した時間・地点・

清人吳有如之題記、可謂一詳細生動之目擊報告。火球惊過南京城的時間・地点・目擊人数・火球大小・顏色・發光強調・飛行速度以及各種猜測又不得其解、皆有明確記述。此画約作於一八九二年（光緒十八年）、在一百多年前、世人尚無飛碟和UFO之說法、画家顯然未能意識到、這幅《赤焰騰空》図、竟成為今人研究UFO的一則珍貴歷史資料。（原文簡体字 傍線明木）

私が傍線をつけたのは誤字等の問題のある場所である。特に呉友如を吳有如と誤ったのはいただけない。さらに引用文にも誤字脱字が目立つ。内容が奇抜であろうとなからうと、否、主張の内容が奇抜であればなおのこと、引用はなるだけ正確に、というのが小論の主張なのであるが、小論で何度も触れるようにUFOの存在を主張する方々はどうも引用のしかたが杜撰なようだ。敢えて読者の便のために、中国青年出版社の影印本により今一度全文とその訓読を掲げる。

九月二十八日、晚間八点鐘時、金陵城南隅、忽見火
毬一團、自西而東、形如巨卵、色紅而無光、飄蕩半
空、其行甚緩。維時浮雲蔽空、天色昏暗。拳頭仰視、
甚覺分明、立朱雀橋上、翹首跂足者不下數百人、一

目擊者の人数・火球の大きさ・色・光の強さ、飛行速度、及び各種の推測不能なことに関する、明確な記述がある。この画は一八九二年（光緒十八年）頃、今から百年余り前に作られ、世の中の人にはまだ空飛ぶ円盤とUFOという言葉はなく、画家がそう認識はできなかつたことは明らかだが、この「赤焰騰空」図は、現代人がUFOを研究するための貴重な歴史資料となつたのである。

炊許漸遠漸滅。有謂流星過境者、然星之馳也隣息即杳、此球自近而遠、自有而無、甚屬濡滯、則非星馳可知。有謂兒童放天燈者、是夜風向北吹、此毬転向東去、則非天燈又可知。衆口紛紜、窮於推測。有一叟云、是物初起時微覺有聲、非靜聽之不聞也。係由南門外騰越而來者。嘻、異矣。

暗。頭を挙げて仰視すれば、甚だ分明と覺ゆ。朱雀橋上に立ちて、翹首跂足する者数百人を下らず、一炊許にして漸く遠く漸く滅す。流星の過境するなりと謂ふ者有り、然るに星の馳するや隣息にして即ち杳く、此の球近きよりして遠く、有よりして無、甚だ濡滯に屬せば、則ち星の馳するに非ざること知るべし。兒童の天燈を放つなりと謂ふ者有り、是の夜風は北に向ひて吹く。此の毬転じて東に向ひて去れば、則ち天燈に非ざること又知るべし。衆口は紛紜として、推測に窮まる。一叟の云ふ有り、是の物初めて起^とびし時、微かに声有りと覺ゆ。之を静聽するに非ざれば聞こえざるなり。南門の外より騰越して來たる者に係る。嘻、異なるかな。

内容については前掲の武田氏を参照されたい。

さて、これとは別にこの「中国のUFO」には信じがたい問題がある。このページに掲載されている画像をプリントアウトしたのが図1だ。一方図2は『文化故事』に引用された「赤燄騰空」図である。これらを比べると「中国のUFO」掲載の図1ではUFOがとても大きく描かれていることが分かるだろう。図2が明らかにオリジナルそのままの影印であり、武田氏の掲げる図版もこの図2と同一である。図1のバカでかいUFOは手が加えられてい

るのだ！ これはいくらなんでも反則である。それもご丁寧にやや橢円形に描いてあって、原文の「形は巨卵の如し」に忠実な描写、或いはいかにもUFOを思わせる形になつていて。またUFOの付近に雲らしきものも加えられている。

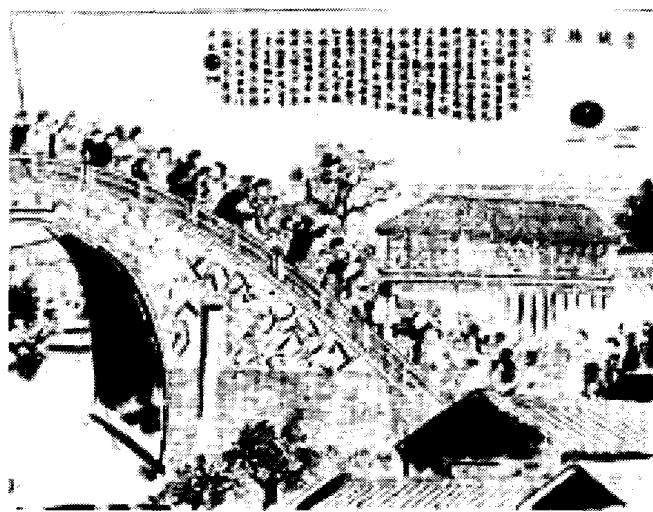


図1

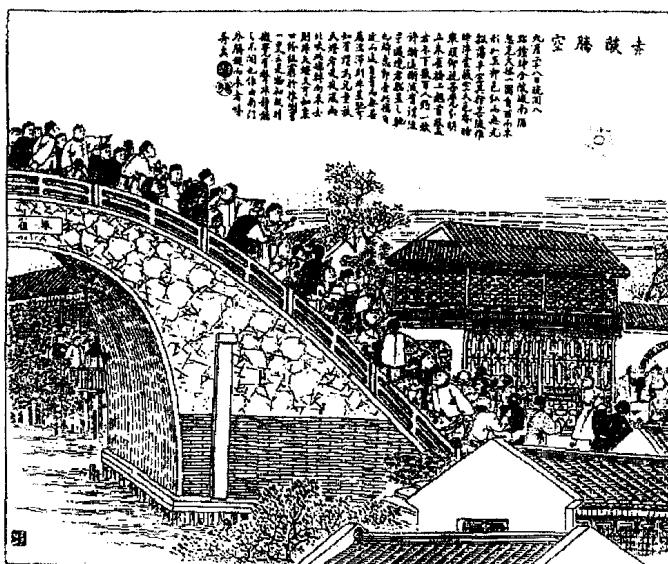


図2

確かに低画質の小さな JPEG 画像では、オリジナルの小さな点は見えにくい。読者に UFO の存在を信じてもらえるようレタッチして強調したい気持ちは分かる。しかしそれなら画質を上げるか、図を大きくするか、或いは矢印でも用いて場所を示すのが本筋である。

問題の UFO の部分を中心国青年出版社の影印本から拡大してみたのが図 3 である。武田氏は「見上げてごらん UFO を」で「右上にチヨンと描かれた UFO」と書いておられるのだが、確かに「チヨン」という感



図3

じで、目立つて明るく輝く星のようにも見える描写である。一方強調された方のUFOは黒々と巨大でとても「チヨン」どころの話ではない。中央上部にミカンのベタのような白い点が見えるのは位置からしてオリジナルの「チヨン」を塗り残しているのか。

もうひとつ、「やるに頭の痛くなる」とある。この「中国のUFO」のコンテンツは、中国の他の様々なウェブページに引用されている。「雅虎^{チャイナ}」により私が検索した限りでは、そうしたページが全て「中国のUFO」の問題点を改めることなくそのまま掲載しているのである！ 加筆されたバカでかいUFOの図はもちろん、「吳有如」などの誤字も全てそのままである。今のところ武田氏や『文化故事』が掲載しておられるような正しい図版を掲載しているページも、文字を正しく掲載しているページも、ただの一件も見つからない。

ア、新想網^{ネック}／金陵赤焰騰空図

<http://newthink.stormpages.com/wxts4/wxts2.htm>

イ、熱線^{ホットライン}／専題／中国歴史上最大の事件／金陵赤焰騰空図

<http://news.wuhan.net.cn/La/20010316/0061032.htm>

ウ、外星生命不解之謎／生命時空奥秘論文集第一部分／金陵赤焰騰空図

<http://qzbt.home.chinaren.com/smsk/jcl.htm>

4、TT98.com 天天都発・UFO新聞>金陵赤焰騰空図

http://www.tt98.net/news/ufo/00190_06231521_jinlingchitu.htm

オ、天極 ChinaByte>E時代>科学与探索>金陵赤焰騰空図

<http://www.yesky.com/20010620/186138.shtml>

カ、下一代>青春 在線>神秘的宇宙>UFO大揭密>中国古代のUFO記録・金陵赤焰騰空図

<http://www.xiayidai.com.cn/qczx/smdyz/ufo/gudai.htm>

キ、武漢公衆金網学校>科海縱横>自然之謎>古代中国的UFO記・金陵赤焰騰空図

http://www.whedu.com.cn/kewai/science/nature/nature3/nature3_7.htm

ク、奥博教育網>科学樓>天文探索>飛碟之謎>金陵赤焰騰空図

<http://www.oh100.com/tech/tianwen/fdzm/200107/02030102124.html>

ケ、教育在線>知識百花園>天文博覧>追跡UFO>中国古代のUFO記録>金陵赤焰騰空図

<http://www.edunet.com.cn/zhishihuayuan/twbl/ufo/gdzg.htm>

」の内アの「新想網」の掲載する「金陵赤焰騰空図」が「選自UFO在中国(UFO在中国よつひだ)」と引用の出所を明示している他は、ほとんど典拠を記していない。わずかにイの「武漢熱線」が「載互联网（インターネットより掲載）」と断っているが、これでは典拠を示したいにもなっていない。これらの中にはUFO関連のページも、そうではない一般のページもある。書籍を引用するのとは違い、ウェブページのコンテンツを引用するにはテキストデータと画像ファイルをそのままコピー・貼り付けすればよい。手軽なだけに、テキストのチェックや典拠の確認がおろそかになりがちである。典拠を示せば知らんぷり、といったのは論外だ。まったく「トンデモ話」の流布の

過程をさまざまと見る思いである。

この加筆されたUFOの図が流通すれば、呉友如の意図をはるかに離れたオカルト話として一般の人たちに広まりはしないかと懸念する。特に右のカーチは題名から分かるように、青少年が様々な知識を勉強するためのサイトである。「下一代（ネクストジエネレーション）」然り、「奥博教育網^{ネット}」然り、「教育在線^{オンライン}」然り。ここにはお勉強のためのまともなコンテンツが多数掲載されている。この中に「金陵赤焰騰空図」のようなものが紛れ込むのが怖いのである。誤解しないで欲しい。UFOや宇宙人が悪いと言うのではない。このような元の資料を改竄し、引用も誤字だらけのものが紛れ込むのが困る、と言うのである。

インターネットの世界というものは、書籍に比べてはるかに簡単に情報を発信することができる。しかし書籍であるがウェブページであろうが、学者であろうが愛好家であろうが、論証の基本的な約束事に変わりはない。情報を自分の都合で改竄しないこと、典拠を明示すること、等々。¹⁶最近出た『2ちゃんねる宣言』という本に、巨大匿名掲示板に関する次のような発言が引用されている。

匿名掲示板では書き手もさる事ながら、読み手にも相当の能力を必要とする。書き込まれた情報は、正しい情報、偽情報、笑いの為のネタ情報、ある種の大衆操作情報、ただの邪推、特に意味の無い書き込み等様々である。

これを完全に判別するのは難しい。まして、テレビやラジオ、新聞等、公共的メディア情報という薄っぺらい信頼だけで、全ての情報を鵜呑みにして育ってきた我々にとってはある意味、修行の場に近かつた：

しかし事は巨大匿名掲示板に限ったことではない。インターネット全般にも、いや日常の書籍や新聞・雑誌全てにもそれは言える。溢れかえる情報を鵜呑みにするのではなく、それぞれの情報の意味合いを読み取るという、広い意味の情報リテラシーこそ昨今の世の中で重要なことなのである。一度流通した情報の真偽を見極めることは、自分の手

で調べてみるという手間を惜しんでいては難しい。大学の一般科目が学生に教えるべき眼目もそこにあるように思う。

但し一つお断りしなければならないことがある。「中国のUFO」と影印版の「赤燄騰空」図をさらに子細に観察するといくつか疑問が湧く。図1と図2ではUFO以外の細部に細かな相違があるのだ。画像が小さくて分かりづらいのだが、ざっと見ただけでも橋の右手奥の建物の一階部分、同じ建物の左上の樹木、同じく右の樹木、画面右隅壁の円形の通り道、画面右下の建物の壁面、橋の下から川に降りる階段、画面最下端の樹木、橋の側面下部の煉瓦、同じく側面石積み、橋の下面、橋の向こうにのぞいている樹木と建物といったところの形状が両者で微妙に異なっている。特に下の建物の壁面と橋脚の下面が黒くなっているのは大きな違いで、陰陽が反対になっている。木版の場合も石印の場合も、広い面積を黒ベタにすることはあまり考えられないでの、UFOを加筆した犯人が他の場所も修整したのか、また画像のスキャンの過程の何らかの理由で潰れた可能性もある。或いは同じ場面を描いた異本が存在するのかもしれない。但し後の人気が、例えば呉友如の死後に『呉友如画宝』が編纂される際に、せっかくでっかく描かれている飛行物体をわざわざ小さく書き直すことは考えにくい。もともとは「チヨン」であったのを後で誰かが大きく加筆した、という方が可能性としては高いと考えるのが普通であろう。さらに調査してご報告したいと思うが、もしもバカでかいUFOの異本が存在するならば私の勇み足だということになる。予めお詫びしておく。

ここで武田氏が前掲『呉友如の事件帖』で

台湾では、三個の光る球体が出現したござりまして、『点石斎画報』にも絵が載りました。

と述べておられたのを思い出してみよう。これは「空際火流」という記事で、武田氏と中野美代子氏の共著『世紀末中国のかわら版 絵入り新聞『点石斎画報』の世界^[17]』に「ありやなんだ！ 出現！ 謎のU・F・O^[18]」と題して影印と訳文が掲載されているので是非それをご参照いただきたい。図4に掲げたのは廣東人民出版社の影印本によるもので



図4

ある。さてこの記事もいかにもUFOといつたところで、「赤燄騰空」と並んでUFOの目撃証言としてもてはやされそうなるところであるが、武田氏が取り上げておられるのみで、意外にも中国のUFO研究家からは全く言及がないのはどうしたことだろうか。中国の「雅虎中国」や台湾の「Yahoo!奇摩」で検索してみても、『点石斋画報』の「空際火流」に言及したウェブページは一件もなかった。さきほどの「赤燄騰空」はまだしも宵の明星の見間違いで説明のつく話だったのに対し、三機編隊で明るい光を放ちながら東北から西南へ移動している点など、むしろ現代的UFOに近いとも言えるのである。

考えるに、これはあるUFO説話が一度成立してしまって、既にある話をそのまま受け売りするだけで、自分で確かめさらに探求するという態度もない愛好家が多いことに原因があるのでなかろうか。「赤燄騰空」はUFOだが「空際火流」はUFOではない、という積極的判断があつたわけではなく、単に既存のものを引用しているだけなのである。「雅虎中国」や「Yahoo!奇摩」でこうした記事を検索してみて感じることは、UFO関連のページはあまたあれども、そこで目に入るコンテンツは意外に少ないということだ。つまり、いろいろなページで同じコンテンツに何度も出くわすのである。どうもある一定量のコンテンツの相互引用でこの世界は成り立っているようなのだ。そうすると右の

「赤燄騰空」の記事を最初にUFOの証拠として取り上げたのが誰なのかに興味が湧いてくる。

台湾のウェブサイトに掲載されている「外星人到地球的相關証拠 一、古籍中的記載²⁰」というコンテンツに、次のようにある。

另外有清末民初上海「申報」出版的新聞性画刊・

《点石斋画報》曾刊載一些異象、其中有些屬幽浮現

象、取一則「赤燄騰空」(図、文詳見《飛碟探索雜誌》第十三期第七頁)。

(古籍中のUFOの証拠として)他に清末民初の上海「申報」出版のグラビア報道雑誌・『点石斋画報』

に掲載されたいくつかの怪現象がある。そのなかのUFO現象に属するものとして、「赤燄騰空」がある。

(詳しい図と文は『飛碟探索雜誌』第十三期第七頁を参照)

最後のこの雑誌名が問題だ。『飛碟探索』というのは中国のUFO研究雑誌としては最も歴史のあるもので、武田氏も前掲「見上げてごらんUFOを」で触れておられる雑誌である。そして創刊の際に、なんと彼のJ・アレン・ハイネック博士²¹が祝辞を寄せたのだそうだ！一九八〇年創刊で隔月刊だから、その第十三期はおそらく一九八一年だろう。UFO関連の中国のウェブページはこの雑誌に掲載されている図と文章を参照している可能性がある。これは是非とも原誌を確認しなければならないが、残念ながら未見である。今後調査してまたご報告したい。(以下次号)

(受理日 平成十四年二月二十日)

注

(1) 「UFO」という言葉の定義については、

菊池聰著『超常現象の心理学 人はなぜオカルトにひかれるのか』平凡社新書28 一九九九年

第2章「宇宙からの使徒」

山本弘・志水一夫・皆神龍太郎著『トンドモ超常現象99の真相』洋泉社 一九九七年

第1章「UFOの伝説」

皆神龍太郎著『宇宙人とUFO とんでもない話』日本実業出版社 一九九六年

第1章「UFO目撃報告の真偽」

高倉克祐著『世界はこうしてだまされた さらばUFO神話』悠飛社 一九九四年

第1章「UFOは神話である」

志水一夫著『トンドモ超常学入門 志水一夫の科学もドキ!』データハウス 一九九七年

第一部「トンドモUFO学入門」

などを参照。

事実アメリカ映画を見ていると、エイリアンクラフトではなく、未確認の航空機の意味でUFOという言葉が用いられているのにしばしば出会う。例えば映画「Fail Safe」(邦題:未知への飛行 シドニー・ルメット監督 ヘンリー・フォンダ主演 一九六四年 アメリカ)で、^{ビッグ・ボーデ}作戦表示板に次のように出てくる。

UFO SIGHTED VISUALLY AND CONTACTED BY RADIO...

IT IS A COMMERCIAL FLIGHT OFF COURSE DUE TO HIGH TAIL WINDS AND POWER FAILURE IN TWO

ENGINES...

(UFOを目視確認し無線連絡した…。強い追い風とハンジン二基の不調でコースを逸れた民間機である…。)

TVリメイク版（スティーヴン・フリアーズ監督 ジョージ・クルニー主演 1999年）もほぼ同じ。但し、リメイク版には原作はない。

"Maybe this time it's a real UFO."

"From outer space? I wouldn't mind that. Give me something to worry about besides the Russians."

（「本物のUFOかね。」「宇宙人か、いいね。ソ連以外の心配もしたこ」）

というセリフが用いられているのが面白い。また日本語字幕も六四年の原作では「UFO」となっているのに対し、1999年のTVリメイク版では「物体」となっている。それだけ近年はUFO=空飛ぶ円盤というイメージが普及してしまっているところとか。

(2) 王矛・王敏共著『中国文化故事物語』原書房 一九九〇年

本書の著者紹介によると王矛氏は一九九〇年六月に交通事故で他界されたそうである。本書の印刷が八月三十日、発行が九月二十二日だから、本当に突然の出来事だったようだ。冥福をお祈りしたい。

(3) 『四庫提要』には「其平生之精力、全帙之菁華、惟在二十畧而已」、また「其氏族、六書、七音、都邑、草木昆虫五畧為旧史之所無」とある。

ついで『文化故事』による『通史略』の注釈は、

「通志」は中國宋代にできた史書。宋の鄭樵撰、二百卷。

と『通志略』ではなく『通志』の説明になってしまっている。また続いて、

明の陳宗夔校〈通志略〉もある。

と少々トンチンカンな注になつてゐる。『通志略』の内容自体はあくまで鄭樵の『通志』の一部であり、明の陳宗夔はその校勘を行つたのである。また本書全般に言える」とだが、書名括弧は『』に統一していただきたいものである。

(4) 例えは最近充実してきた古典文献データベースを利用して検索する場合、もしも「星赤而芒角」や「往大還小」をキーワードにしたら、『通志略』の記述はヒットしないことになる。

(5) ミシェル・フーコーの『言葉と物 人文科学の考古学』(渡辺一民・佐々木明訳 新潮社 一九七四年)の序に、ボルヘスのテキストの引用する支那の百科事典の奇妙な分類法の話が出てくる。この原典が中国のどの書物かは私は未見だが、ただこれは類書の分類が変形して伝えられたものであろう。

(6) 四庫全書所収本では注者は欠名だが、和刻本『(新板増廣附音釈文) 胡曾詩註』(『和刻本漢詩集成』第十輯所収 汲古書院一九七四年)には「廬陵胡元質註」とあり、胡元質という人物の注である」とが分かる。

(7) 中国のウェブページ「錦州三国遊戯網▽強檔推薦▽三国古地名 (一)」

<http://sang21.myetang.com/qdtj/q602.htm>

では次のような説明がある。

相伝諸葛亮就死在此地。臨終時、拠説有一顆巨星降落

在這裏的軍營中、人們就把巨星墜落的地方、叫「豁落城」、城下的谷湾叫「落星湾」、又把湾中的村庄叫「落星堡」。

関連する地名は中国のウェブページ、

言い伝えによると諸葛亮は此の地で亡くなつた。臨終

の時、巨星がひとつこの軍營に落ちたと言われており、人々は星の落ちた場所を「豁落城」と呼び、城の下の湾を「落星湾」、湾中の村を「落星堡」と呼んだ。

「華夏旅友網」>錦綉中華>西安>旅在西安>綺山麗水>五丈原」

<http://ctn.east.net.cn/china/xian/you4-16.htm>

「華夏旅友網」>錦綉中華>寶鶴>旅在寶鶴>五丈原諸葛亮廟」

<http://ctn.east.net.cn/china/baoji/you1.htm>

「歴史文化」>古跡>皇天后土>五丈原与諸葛亮祠」

<http://heritage.cn.tom.com/Archive/2000/10/24-16465.html>

「岐山之窓」>鄉鎮介紹>落星鄉」

<http://www.qishan-window.com/gaikuang.html#.html>

にも解説がある。

(∞) 「皆之衆」>「三国志紀行 2000」>衣冠塚と落星石」

<http://chinaclub.comic.to/sangoku2000/xian9.htm>

「Chipo's World」>中国旅行体験記>五丈原編」

http://www.geocities.co.jp/SilkRoad/9628/travel/wata_pic2.html

というウェブページには、五丈原周辺の写真や旅行記と共に、この「落星亭」の写真が掲載されている。前者は

衣冠塚の右横奥、外院の中庭には、諸葛亮が死んだ時に流れた将星を祭った、落星亭がある。三国演義のオリジナルキャラクター・明木注)・周倉の墓があるらしいだから、諸葛亮の死を告げる隕石らしいあっても不思議じやないかも(笑)。この五丈原の東側にある落星坡、落星湾、落星郷の由来は、全てこの石に起因するものらしい。

後者は

これが演義であった、孔明が死ぬときに、流れ星が落ちた場所。「落星石」です。本当に隕石が落ちたの？って思う人は是非足をはこんでください。そこに碑があればそれでいいのです。

とコメントしておられる。

- (9) 今鷹真・小南一郎・井波律子著『世界古典文学全集24巻B 三国志II』筑摩書房 一九七七年
- (10) 武田雅哉著『清末絵師呉友如の事件帖』叢書メラヴィリア5 作品社 一九九八年八月
第十三回「博物先生も答は出せぬ山ほど積まれたX檔案」(X檔案はXファイルの意・明木注)
- (11) 中国飛翔計画図説⑧「見上げてごらんUFOを」『月刊しにか』一九九四年十一号(大修館書店)所収
- (12) 碟は小皿の意。よって「飛碟」は「空飛ぶ円盤」の中国語訳。
フライイングパン
- (13) 小論其一で取り上げる予定である。
- (14) 「飛碟在中国(UFO in China)」>中国古代的UFO記録>金陵赤焰騰空図
<http://www.sinote.com/ufo/ancient/ancient2.htm>
- (15) 『呉友如画宝』中国青年出版社 一九九八年
- (16) 井上トシユキ+神宮前.org『2ちゃんねる宣言 挑発するメディア』文藝春秋 二〇〇一年
- (17) 『世紀末中国のかわら版 絵入り新聞『点石斎画報』の世界』福武書店一九八九年 後に中公文庫(な353)一九九九年
- (18) 第五章「科学と機械の幻想譜」・「ありやなんだ！出現！謎のU・F・O」
- (19) 広東人民出版社影印『点石斎画報』全四十四冊 線装本 一九八三年
- (20) 「T UFOA(台湾飛碟学研究会)>UFO研究(飛碟研究)>外星人到地球的相關証拠 一、古籍中的記載」
<http://www.ufo.org.tw/study/fk31.htm>

作者は何顯栄氏。

(21) Josef Allen Hynek (一九一〇～一九八六) ノースウェスタン大学天文学部教授、米空軍のプロジェクト・ブルーブック科学顧問。「第三種接近遭遇」という言葉を提唱した。スピルバーグの映画「未知との遭遇」のテクニカル・アドバイザーもつとめている。詳しくは皆神龍太郎著『宇宙人とUFO とんでもない話』（前掲）や志水一夫著『トンデモ超常学入門 志水一夫の科学もドキ！』（前掲）などを参照。

(22) 「坐擁書城×月球之謎×月球周囲的UFO活動」

<http://www.bookbar.net/khwx/foreign/ylzm/007.htm>

の訳者注による。

（次号目次）

三、貝の化け物？ UFO？ 『夢溪筆談』「異事」

四、蘇東坡の日撃したUFO？ 蘇軾「遊金山寺」詩

（中京大学文化科学研究所『文化科学研究』Vol.13 No.2掲載予定）

※小論中で扱った資料の内、胡曾『詠史詩』については九州大学文学部非常勤講師の岡村真寿美氏に、吳友如については仏教大学文学部の若杉邦子氏に、それぞれ多大なご教授を賜った。この場を借りて篤くお礼申し上げたい。

【附記】

小論で取り上げた『晋陽秋』の調査の過程で、大阪府立上神谷高等学校図書室の中国図書文庫「正岡文庫」に『晋
陽秋』という本が所蔵されていることが分かった（「大阪府立上神谷高等学校▽中国文化交流俱楽部▽中国図書文庫」
<http://homepagel.nifty.com/xiongmao/Tosyo.htm>により検索）。上神谷高校には中国残留孤児帰国者の子女のク
ラスが設けられており、「正岡文庫」はここで学ぶ生徒達のために寄贈されたものだそうである。『晋陽秋』の単行本
が存在するとすれば大変興味深いことなので、同校の厚意により閲覧させていただいたところ、これは

慕湘著 解放軍文芸出版社精品書系『晋陽秋』（解放軍文芸出版社 一九九一年）

というもので、抗日戦争を描いた現代小説であった。書名の由来は「晋陽」という地名（同書二頁の注一に「太原県
は古くは晋陽と称し、太原市の南四十里にある」とある）で、残念ながら小論とは無関係なものだと判明した。

しかし「正岡文庫」所蔵の書籍を閲覧でき、また同クラスを見学して、帰国者の子女が日本での大学進学を目指し
て努力している様子に接できたのは望外の幸せであった。同クラス担当の奥田彰氏、岡田実千子氏に心よ
りお礼申し上げる。